

ある

小学校教師

の

短編

敗北

山中與隆
YAMANAKA TOMOTAKA

Duo-Yamanka

ある小学校教師
の
敗北

山中與隆

目次

ある小学校教師の敗北

1

編者あとがき 53

ある小学校教師の敗北

作 山中與隆

僕は、転任してきた学校で五年生のクラスを受け持つことになった。

四月は教師にとっても、期待と不安の季節である。

これまでのクラスが一旦解体されて、新たに組まれたクラスだったから、それがどのような集団になるかは、担任のこれからの学級経営にかかっている。『期待と不安』と言ったが、僕の場合ほとんど不安ばかりであった。そのときの僕は前任校での苦い経験にまみれていたからである。

前任校、つまり三年前に大学を卒業した僕が初め

て赴任したのは比較的規模の小さな学校だった。やはり五年生を受け持つことになった最初の年、やる気満々の若い男性教師として子供から、父兄からそして同僚からも期待されていたと思う。

五年生は、四十二名の僕のクラスがひとつだけだった。最初のうち子供たちは素直で、毎日夜遅くまで教材研究をして臨んだ授業に関心を持って聞いてくれているように思った。しかし後で考えると、そ

れは新しい担任への珍しさが手伝ったものに過ぎなかつたようで、一学期の後半になると、子供たちの様子が明らかに変わってきた。

そのころ僕は校長から、何か困っていることはないかとしばしば声をかけられていた。僕は、どうしたら子供が授業に興味を持ってくれるのか悩んでいたが、校長には打ち明けなかつた。校長は、肩の力を抜いてがんばってくださいと、いつも僕に言つて

いた。校長は一日に一回は授業中の校内を回っていたから、廊下を通っていくだけだが、中で行われて
いる授業の雰囲気は敏感に察することができたので
あろう。とうとうあるとき、校長の方から具体的な
アドバイ스가あつた。授業を一生懸命やっているの
は認めるが、教師の側からの一方通行になつていな
いだらうか。肝心の子供たちの理解を助けるような
工夫をしないと、せつかくの教材研究が生きないと

いう内容のことを言われた。また、授業だけでなくホームルームや掃除、給食その他の指導にも力を入れるようにとも注意された。ほかの教室に比べて僕の教室は、何となく雑然としている。授業中も、騒がしいというほどではないが子供たちの注意は散漫で、ごそごそとした動きが結構多い。指名されて答える子供の発言に対する、他の子供の反応も鈍い。

一学期はそんな調子で、何とか夏休みにたどり着

いた。僕は、休みを利用して学級経営や授業の進め方に関する本を読み、校長に勧められていくつかの講習会や研究会にも参加した。夏休み中も毎日学校に出て勉強する僕に、リフレッシュするのも大事なことだから、少しは学校を離れて遊んできなさいと教頭に言われたほどだった。子供たちから離れて勉強しているのと、上手くいきそうな気がして、気力が蘇ってきた。新鮮な気持ちで二学期を迎えた。初め

のうちには運動会の練習などで、比較的变化の多い毎日にまぎれて日が過ぎたが、運動会が終わり落ち着いてくると、一学期の終わりころと何も変わらない状態が始まっていた。授業中の私語は増える一方で、僕が子供たちに注意する調子は、だんだんヒステリックになつていった。全校十クラスで、荒れたクラスとといったものが無かったこの学校では、僕のクラスは目立った。

五年生を持った担任は、六年生にそのまま持ち上がるのがこの学校のやり方だったが、僕の場合持ち上がりは無かった。

次に受け持ったのは四年生だった。この学年は二クラスあつて、一クラスの人数が理想的といわれる二十数名であつた。三年からのクラス替えは無く、もうひとつのクラスも、担任は新しく赴任した若い男性教師になつた。この学年は子供たちはそのまま

で、担任だけ総替えとなつたのである。僕たちが受け持った新しいクラスは、教師間の評判がよく、特に僕のクラスは、他の教師が羨むほどの活発な集団作りが出来ていた。『良い集団は良い教師を作る』という言葉があるが、そうなることを期待された配置であつたようだ。

たしかに素晴らしい集団だと思つた。僕が指示など何もしなくても、子供たちはどんどん動いた。僕

は前のクラスでは、給食を黒板の横の窓際にある教師用の事務机で生徒と向き合うようにして、というより気分的には、机の前の小さな本立てに隠れるようになかった。しかし今度のクラスでは、子供たちの班に一日ずつ招待されて一緒に食べることにになった。各班では、僕を招く順番が来るのを心待ちにしていた。しかし、前の学年ですっかり自信をなくしていた僕は、自分のことを子供から見ると

まったく魅力のない人間なのだと思っていた。

前の学年であったことも、そう思い込むようになった理由の一つになっていた。昼休みに運動場で子供たちと遊んでいると、クラスの男の子が僕のお尻に取り付いてくる。そしてそこに鼻を近づけてから、「くっさー」

と大声で笑いながら離れていくのである。するとほとんどは別の子が同じことをする。僕がやめるように

言うと、それ以上は広まらなかつたが、恥ずかしい出来事であつた。そのころ僕は痔に苦しんでいた。朝トイレで苦勞した日には、自分ではよくわからなかつたが、そんな風に臭いがかがれると実際に臭かつたのだらう。それ以来、ぼくは自分を薄汚れた人間だと思ふようになっていた。だから、給食に招待されるときの、子供たちの無邪気な歓待ぶりには戸惑いを感じるのだつた。子供たちはそんな僕を巻き

込みながら学校生活を楽しんでるようであつた。

子供たちは、あるとき僕に、全校児童に言いたいことがあるので、朝礼での発言の機会を作つてほしいと頼んできた。たまたま週番に当たつていて朝礼の進行がかりをしていたので、僕は許可した。ある日の朝礼で僕のクラスの女の子二人が朝礼台に上がつて、

「まずお願いですが、最近運動場の掃除が行き届い

ていないので、しつかりしてもらいたいと思います。
二つ目は私たちの教室の後ろに貼る図画が新しくなるので皆さんも見に来てください。最後に、私たちは給食のときに先生を班に呼んで一緒に話しながら食べています。とても楽しいから皆さんもぜひやってみてください」

と、実にはきはきとした言い方であった。この日の放課後、子供たちは全員で二日前の図工の時間に描

いた絵を、工夫を凝らしてきれいに貼り替えた。もちろん僕に断った上でのことだが、子供たちの自発的な行動であつた。子供たちはとにかく何でも先生、先生と話しかけてきた。

朝礼のことは職員会で話題になつた。発言の内容を事前にチェックしたのかどうか問われた。していないと言うと、特に運動場の掃除をしているクラスの前であんな

ふうに言われるのは心外で、自分もそれなりに点検しているつもりだし、掃除当番にあたっている子供たちもひどく傷ついていると言うのだ。子供たちにも五、六年生が当たる週番制度があり、掃除の状態を見てまわっている。その週番から特に何も指摘されていけないのに、どうして四年生に言われなければならぬのかと、不満をぶつけられた。

僕のクラスの子供が非常に活発であることは認め

るが、いささか行き過ぎで、朝礼のような全体の時間をああいいうことに使わせるのはいかがなものかという意見も出された。以後指摘されたことは十分に配慮していくとということでの場は終わった。掃除の件で怒った先生もそれ以上何も言わなかったのでほっとした。僕は、この職員会のことを子供たちには言わなかった。

朝礼の反響があつて、たくさんの子供たちが、僕

の教室に絵を見にやってきたので、子供たちは喜んだ。そのころ班毎に机を向き合わせて給食を食べているクラスは多かったが、その班に先生が呼ばれて一緒に食べるクラスは現れなかったようだ。給食のときに担任が本を読んで聞かせるなどそれぞれの工夫があったからであろう。しかし、あいかわらず子供たちは次から次へといろいなることを思いついては学級会で意見を出し合って、それを行動に移すの

だった。あるときは、体育の時間に近くの水源地のある公園までマラソン遠足をさせてほしい、そのとき家から水筒とおやつを持ってくることを認めて欲しいと言い出した。そのころ水筒を学校に持つてくることは認められていた。ただ、僕のクラスではないが、ジュースを入れてきて問題になったことがあった。しかし、おやつはちよつと問題だなと思つた。僕はおやつのことも含めて校長に許可を求めた。

案の定、マラソンと水筒までは許可されたが、おやつはだめだった。そもそも僕の学年は二クラスあるのに、一方だけにそんなことを認めるわけにはいかないということもあった。僕は、おやつが禁止されたことを子供たちに言いづらかった。しかし、子供たちは予想の外あっさりと了承した。もしかしたら、初めからだめに決まっているとわかっていながら要求したのかもしれない。体育の時間内に収めるとい

う条件でマラソン遠足を実行した。この件で、僕は子供たちに振り回されているということがわかってきた。そのころから僕の言動には、子供たちの動きをセーブするような調子が目立ってきたのだらう、子供たちのそのような提案は減り始めた。

しかし、授業は何の教科でも活発で、発言も多かった。そのころ僕のクラスでは、教室での発言は挙手した子供を先生が指名するのではなく、意見があ

る子供がさつと立ち上がって発言するというやり方を採用していた。ほかにも立ち上がった子供がいれば、譲り合ってどちらかが先に発言するのだ。

僕は前任者が作り上げたこの活発さを維持しなければならぬという気持ちばかりが強く、授業が有効に進むように発言の内容を導くということができていなかった。授業は一見活発そうに見えたが、内容的には焦点の定まらないものになっていたのだ。

その傾向は僕自身も気づいていて、改善しなければとあせり始めていた。ちようどそのころ、社会科の研究授業をすることになった。大勢の先生が見守る中でも、子供たちはいつもと変わらない活発さで発言したが、授業後の指導主事を交えた検討会では、まったく授業になっていないとまで言われた。

授業中の活発さは、知らず知らずのうちに騒がしさに変化していった。朝礼で全校児童に向かつて、

掃除をきちんとしてしましようと言ひ、自分たちの教室もきれいに整っていたものが、いまでは何となく汚れっぽく感じられるようになっていた。これは僕が前に受け持ったクラスでも、子供と一緒に掃除をしたりするのにならぬきれいなので悩んだことがある。同じことの繰り返しになってしまっている。僕は、放課後一人で教室の掃除をしておいたことも何度かあった。それは学級経営の行き詰まり

を取り繕おうとしている自分の惨めな姿にほかならなかつた。前任者の作り上げた素晴らしい集団はすっかり姿を消してしまつていた。

子供の間での力関係も少しずつ変わつてきていた。担任の僕に反抗する傾向が強まり、それに同調する者が少しずつ増えていった。逆に何でも僕と相談しながら次々と提案をしていた子供は勢いを失つていった。先生、先生と担任に寄り添うことが、子供同

士で批判されるようになってきていた。僕は、子供が成長にともなうて変化していくこともわからないで学級を經營しようとしていたのだ。その学年は、クラス替えもなくそのまま五年生に持ち上がった。教室は汚れ、授業中は騒がしく、教材の消化は遅れ、僕の苦悩は大きくなるばかりであった。同学年のもう一人の先生と、音楽と習字の授業だけを交換して行っていたが、僕は隣のクラスに行つてする音楽の

授業が唯一の心が安らぐ時間になっていた。一方、僕のクラスに来て習字の授業をしていた隣の先生は、僕のクラスは良い子供たちだと言っていたから、習字の授業は上手くいっていたのであろう。

あるとき、僕はその隣の先生と一緒に校長とPTA会長に呼ばれて、同じ学年で、片方は上手くいっており、片方はめっちゃくちゃというのはいったいどういうことだ、二人がもつと力をあわせてやるよう

にしなさいと注意された。その場で会長はわたしの教室のことを『まるで豚小屋だ』と評した。この言葉はかなり当たっていただけに胸に突き刺さった。子供たちが掃除をすませて帰っていた教室には、給食のパンくずは散らばり、雑巾は教壇の横に落ちていた。僕の仕事机の上も子供たちの提出したノートがいつまでも崩れそうに積み重なり、採点が滞っているテスト用紙や、ずいぶん前の写生の時間に

描かせた絵がところせましと盛り上がっている。僕は男だから泣きこそしなかつたが、屈辱と敗北と無力感に襲われた。何とか立て直したい、立て直さなくてはいけないという気持ちはあつたが、それは絶望感に压倒されてしまつていた。

三月末、僕は春休みに逃れこんだ。まるでゴングに助けられて自分のコーナーに倒れこむボクサーのようだった。春休みに入る前、卒業式での僕のクラ

スの行儀悪さは目立ち、父兄の眉をひそめさせた。ほかの先生方もさぞかし肩身の狭い思いをされたことであろう。

転勤願いを出したわけではなかつたが、僕は転勤となつた。

希望に燃えて始まつた教師生活であつたが、泥にまみれて三年間が終わつた。泥だらけの顔では目もまともには開けられないが、冷静に思い返すと悪いこ

とばかりの三年間でもなかつた。僕は二年目の初め、
大学時代同じサークルで音楽をやっていた女性と結
婚し同僚や子供たちから祝福された。学校の創立記
念日には選抜した子供たちの器楽合奏を披露して、
われながらいい演奏が出来たと思つてゐる。しかし
これにはちよつと心の痛むおまけがついた。あるP
T Aの役員から、素晴らしい合奏だったが、良い子
だけを集めて良いものが出来てもそれは当たり前で、

褒められることではないと言われたのだ。その役員の子は僕の学年ではなかつたが、成績が良い上に抜群に足が速く、郡内の記録会で優勝もしていた。そんな子を持つ親の言葉だけに重みがあつた。

集団作りの点では完敗であつたが、個々には良かったと思えることもあつた。受け持ったときにはほとんど口を利かないので、お雛さまとあだ名されていたきれいな顔立ちの子がいた。授業で自分から発

言することはまったく無く、指名しても黙って立っているという状態だったが、体育の時間、おとなしいばかりと思っていたその子が、走ったり飛んだりする能力がとても優れていることに気づいたので、僕はみんなにもそのことに注目するように仕向けた。すると、その子はみるみる自信をつけて、ものを言わない子という定評が嘘のように快活になり、体育以外の成績もよくなったのだった。二年くらい後に、

たまたま郡内中学校の体育大会が行われている会場で、その子が陸上部の選手として出場しているのに出会ったことがある。体は大きくなり、鍛えられた力強い太ももで堂々と競技していたのが印象的であった。僕に気づいて挨拶に来たその態度もすっぴん大人びていた。

もつともこのような例は、その子どもも自身の力であつて、僕の及ぼした結果ではない。

クラスが思うようにいかなくなると、僕はよく学校を休んだ。実際に具合が悪くなるのだが、本当によく休んだと思う。風邪といつて三日も休む僕のところには、教頭が様子を見に来たこともある。後から考えると、校長や同僚はもちろんのこと父兄たちも、行き詰って方向を見失っている新米教師を一生懸命支えてくれようとしていたのだと思う。だが渦中の僕にはどんなことも棘のようになしか感じられなかつ

たのだ。

転勤によつて、心機一転を期して一から始めることになつた。

僕の新しいクラスは、生徒たちも僕も新鮮な気持ちでスタートした。五年生だったので、授業内容は三度目ということもあつて、教材研究の苦労は半減してゐた。その分学級経営にエネルギーを割くこと

が出来た。学年は四クラスあり、四人の担任は頻繁に学年会を開いて、授業のこと、難しい子供のこと、学級経営や行事のことを話し合った。教師同士の連帯感があり、自信を無くしている新米には心強かった。しかし、それぞれ自分のクラスがあり、いわゆる雑用も多く、相談にはのってもらえても手を貸してくれるわけではない。結局は自分ひとりで子供たちに立ち向かわなくてはならない。ここでも子供た

ちが担任に反発する場面はあつたが、なぜかそれがあまりエスカレートすることは無かつた。しかし、学級経営が上手くいっているとはお世辞にもいえなかつたと思う。やはり、教室は雑然としていたし、授業中の集中度は低かつた。六年生の夏の野外活動を取り入れた修学旅行では、僕の公平を欠いた扱いに端を発して子供たちがストライキを起こしてしまつたことがある。そのときは随行していたベテラン

教師がその場を收拾してくれたが、これなど完全に学級経営のほころびが表面に現れたものであつた。

父兄会では、私立中学を受験する者もいるのだからもつと授業の中身をしっかりと欲しい、授業が遅れてしまつてゐるのは困ると批判が出た。授業が先に進まないのには実際僕も困つていた。

それでも僕のクラスでは幸いに教室が大荒れということは無かつたが、三年生を受け持っている新卒

の女教師は、ある生徒に文鎮を投げつけられて額にけがをするという事件があった。やはり新卒の別の女教師は、クラスを受け持って間もないゴールデンウィークが過ぎたころ突然退職していった。発表のその日まで、その同学年の先生たちにも退職のことは伏せられていたのだった。僕は、前任校での苦しい経験があったばかりだから、彼女たちの心境が痛いほどわかった。

僕はたまたまやめたりしなかつたが、学級経営で悩んでいた点では彼女たちと変わりなかつたと思う。にもかかわらず前任校の場合ほど大荒れにならなかつたのは、僕が単に子供への接し方に慣れたためなのか、地域による差があるためなのかわからない。前の学校では僕のクラスだけがひどく乱れていたのに、ここではどのクラスにも難しい子供はいて、先生方はそれなりに苦勞しているようにみえた。

教員生活二校目のこの学校には四年間在籍したが、ここでも本業の上であまり良い思い出を残すことは出来なかつた。

ひとつ印象に残っている事がある。汚いなりをしていつもおどおどした表情で、誰とも馴染まず、授業でもただ座っているだけで、みんなからも無視されていくという女の子がいた。それがなぜか僕の受け持ちになってから、ときどきだが宿題をしてくる

ようになり、授業で手を上げるようになり、ついには選挙で学級委員に選ばれてしまった。『しまった』と言ったのは、僕に反抗的な傾向の子がふざけて推薦したのに、同調する者が多くいて当選してしまつたのである。本人がびっくりしたのは勿論のこと、職員室でも話題になった。学級委員選挙で、子供たちの不真面目な行動に振り回された僕の指導力不足の問題としてである。

しかしここにも、だめ教師よりも立派な子供がいた。それはおとなしいが非常に優秀で、前の学期に学級委員だった子である。彼女は何かとわからないことばかりで困っている新しい学級委員に付き添ってアドバイスをし、自分の家に誘って一緒に宿題や勉強をするのだった。もちろん僕がそうするように頼んだりしたのではない。

するとその子は頭をきれいに洗ってくるようにな

り、着ている物もこざっぱりと洗濯されているようになった。実は、その子の父親は罪を犯して刑に服しており、母親は頭部に夫の暴力を受けて正常でなくなっていた。その子が母親と妹のために毎日の夕食を作るといった家庭だったのだ。良い友達が出来たからとはいえ、そのような状況にもかかわらず立ちなおってきたことは驚くべきことであつた。この二人の例は、本来子供が持っている底力を見たよう

な気がする。学期が終わるころには、クラスの誰も
が当たり前のようにその子を学級委員として認める
ようになっていた。

そのころ、僕は遠い地で事業を行っていた父から、
教師をやめて仕事を手伝わないかと誘いがかかった。
僕は飛びつくようにして教職を捨てた。あの退職し
ていった新卒の女教師とは、わずか二年の時間差で

僕も同じように逃げ出したのであった。

退職の挨拶に出向いた隣の中学校で、僕を見つけた卒業させたばかりの子供たちが、教室の窓に群がって手を振ってくれたのが、僕の教員生活最後のページであつた。

転職先は建設材料のメーカーで、僕は商品開発の担当となつた。徹底した利益追求と、ユーザーから

の無理難題、クレーム処理などで決して安易な仕事とはいえなかつたが、直接の対象が物であることの有り難さをしみじみと感じたものだ。それでも、プレッシャーは常に頭上に覆いかぶさるようであり、それが募ると教職にいたときの夢をよく見た。夢は、十年経つてからも二十年経つてからもストレスがたまるたびに現れた。それは子供たちが迫ってくる夢であつたり、欠勤ばかりで久しぶりに学校に行つて、

代わりの先生が授業してくれている自分のクラスのようすを物陰から窺っている夢だったり、教科がまったく進んでいなくて、学期末になっても成績が付けれられない。手元にあるたった一枚のテストの結果だけですべての成績をつけようとしている夢などであつた。

教職を去って三十五年、転職先を定年退職してか

らもすでに七年になる。いまだに、どうしてもう少しまでもな教師になれなかつたのか、なろうと努力することが出来なかつたのか悔やまれる。転職後も、定年まで勤めたとはいえ決して仕事に全力を出し切れたとは思えない。

いまは、趣味の音楽を続けながら余生を送っているが、これでさえ心残りばかりがつのっていく。残

された僅かな人生に、心残りのないように全力投球
できたと思えるような体験をすることが出来るだろ
うか。

完

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 ≪お蓮・勘兵衛 悲恋の墓≫

第二話 ≪緑のトンネルで≫

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

ある小学校教師の敗北

2022年8月30日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：

www.photo-ac.com

タイトル：懐かしい昭和の教室

作者：おりかさん

写真のID：3782209

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
